フランスの地理教科書における人口問題

― 社会を可視化する技法としての〈数字〉―

河合　務*

Population Problem in Geography Textbook in France; ‘Numbers’ as a Technique to Visualize a Society

KAWAI Tsutomu*

キーワード：人口，地理教科書，移民，人種，一体性
Key Words: Population, Geography textbook, Immigration, Race, Unity

Ⅰ．はじめに

地球規模では人口爆発が指摘される今日，〈少子化〉は一国の内部において社会問題化され，国内の諸制度や家族のあり方，教育のあり方等に変革を迫る圧力となる傾向にある。本稿は，20 世紀初頭において世界最高水準の少子高齢国でありながら 21 世紀初頭には少子高齢化の度合いを緩和しつつあることで注目されるフランスを事例とし，同国における人口（population）概念の肥大化と，人口学（démographie）的な学知そのものが構築されていく歴史的・社会的なプロセスを捉え直す研究作業の一環（地理・道徳・家庭科等の教科書の人口記述の分析を行うという研究計画）として，とりわけ地理教科書における人口記述に関する実証的研究を行うものである。

かつてデュルケームは『社会学的方法の規準』（1895 年）において，「数字の表現しているもの，それは集合精神（âme collective）のある一定の状態にほかならない」[1]と述べて，出生率・婚姻率・自殺率といった統計数値に大きく着目することによって「社会的諸事実（faits sociaux）」を把捉し社会学の基礎づけを行おうとした。このデュルケームの試みは西欧 19 世紀に整備された統計局によってもたらされた〈印刷された数字の洪水〉[2]という潮流に掉さすものであり，地理教科書における人口記述も，そうした〈洪水〉現象の一コマである。本稿では，この点についてフランスの初等地理教科書の記述に即して具体的に検討していくこととしたい。今回対象とする教科書は以下のものである。

①Lemonnier, H. et Schrader, F., *Éléments de Géographie*, Deuxième édition, Librairie Hachette et Cie, 1883.
②Schrader, F. et Gallouédec, L., *Petit Cours de Géographie*, Librairie Hachette et Cie, 1906.
③Dubois M. et Sieurin, E., *Cours de Géographie*, Masson et Cie, 1911.
④Colin E., *Géographie Générale*, Librairie Armand Colin, 1927.
⑤Gallouédec, L. et Maurette, F., *Géographie de l’Europe*, Librairie Hachette, 1931.
⑥Kaeppelin, P. et Teissier, M., *La Géographie de la France ＆ des Colonies,* Librairie A. Hatier,1936.
⑦Kaeppelin, P. et Peyralbe E., *Géographie du Cours Supérieur. L'Europe. Les Parties du Monde. Revision de la France et de ses Colonies*, Librairie A. Hatier, 1937.
⑧Kaeppelin, P. et Leyritz A., *Géographie*, A. Hatier, 1961.
⑨Abensour L. et Planel L., *La Géographie Documentaire*, Librairie Classique Eugène Belin, 1967.

*鳥取大学地域学部地域教育学科

筆者は 2007 年度～2010 年度，科学研究費補助金の交付を受け「フランスの少子化問題と出産奨励運動に関する歴史研究」（若手研究 B，課題番号 19730355）」を遂行してきた。同研究では，19 世紀末以降のフランスで出産奨励運動を主導した運動団体「フランス人口増加連合」の機関誌や出版物を主な検討素材としており，学校教科書の人口記述についてはほぼ未着手であった。本研究ではその点を補完し，さらに研究を発展させる意味から，本稿は 19 世紀末以降の初等地理教科書を俎上に載せることとする。

II．地理教科書の人口記述

1．地理教科書の領域分け

地理という教科において人口記述が含まれるのは，いわゆる「人文地理（géographie humaine）」領域である。まず，教科書①を例にとって地理教科書の領域分けについてみていきたい。同書の冒頭では，地理学全般に関する次のような領域分けが述べられている。

「地理学（géographie）とは，地球（la Terre）について私たちに知らせる科学である。
自然地理（géographie naturelle ou physique）と政治経済地理（géographie politique et économique）に分かれる。
自然地理は，自然が作り出した地球の表面について私たちに知らせる。
政治経済地理は，人間が領有している地球について私たちに知らせる。」（教科書①p. 3）

つまり，〈地球に関する科学〉としての地理学を「自然地理」と「政治経済地理」に領域分けするというものである。この二大領域に分ける考え方は，その後の地理教科書でも基本的に踏襲されつつ，各領域の名称は若干の変更が加えられていく。例えば，教科書⑤では「自然地理（géographie physique）」と「人類地理（géographie anthropologique）」という分類[3]，教科書⑦では「自然地理（géographie physique）」と「人文地理（géographie humaine）」といった具合に概略的には「政治経済地理」→「人類地理」→「人文地理」という変遷を辿ることができる[4]。

教科書①では，地軸・公転・大気・水・山・平野など地球の自然地理に関する全般的解説の後，ヨーロッパ，アジア，アフリカ，アメリカ，オセアニアといった大陸・地域ごとの解説が行われ，さらに自国フランスとその植民地についての記述という構成がとられている。

教科書⑤における「自然地理」領域の主な項目は「大地（sol）」「起伏（relief）」「気候」「河川」「海」「海岸」「植物・動物の分布」であり，「人類地理」領域には「人種（race）」「国籍（nationalité）」が主な項目とされ，関連して，「人口分布」や「ヨーロッパの国々の面積と人口の比較」が挙げられている。本研究では，それぞれの地理教科書で具体的にどのような人口記述がなされているのかを分析するため，まずは人口に関する記述箇所を特定することが先決であったのだが，それぞれの教科書の「人文地理」領域の記述を中心に精査し，そこでの「人口（population）」に関する記述がどのようなものとなっているのかを検討していくこととなった。その結果，例えば，教科書①には次のような記述が見つかった。

「ヨーロッパでは，3 つの国の住民数がフランスよりも多い。ロシア（8,400 万人），ドイツ（4,500 万人），オーストリア＝ハンガリー（3,800 万人）。人口密度（densité de la population），つまり，人口数と総領土との関係は，5 か国がフランスを超えている。それはベルギー，オランダ，イ

ギリス，イタリア，ドイツである。

フランスの人口は，他の多くの国が増加しているにもかかわらず，しばらくの間，停滞的（stationnaire）である。」（教科書①p. 59）

ここでは，「ヨーロッパでは，3 つの国の住民数がフランスよりも多い」という，ヨーロッパ諸国との比較においてフランスの人口が「停滞」しているという内容が明示されている。こうした「ヨーロッパ諸国とフランスとの人口比較」という論点は，他の複数の教科書（教科書②，③，④，⑦）においても取り扱われている。同様に，複数の教科書において扱われている論点や，扱われている教科書は 1 つだけであるものの注目したい論点をまとめたのが以下の表 1 である。

表 1　フランスの地理教科書の人口記述の主な論点

	論　点	取り扱っている教科書
1	ヨーロッパ諸国とフランスとの人口比較	①，②，③，④，⑦
2	移民（・外国人）問題	②，③，④，⑦，⑨
3	人種（race）問題	①，②，④，⑤，⑥，⑦，⑧
4	「フランスの一体性（unité française）」	⑥
5	日本の人口増加	④

次節（第 2 節）では，これらの論点について，それぞれの地理教科書の人口記述を具体的に参照しながら検討を行っていくこととしたい。

2. ヨーロッパ諸国とフランスとの人口比較

この論点に関しては, 前節で参照した教科書①のような記述のほか, 次のような記述がみられる。

「住民数ではフランスはヨーロッパ諸国の 5 番目となっている。フランスはヨーロッパでは 1 億 300 万の住民をもつロシア，5,630 万人のドイツ，4,530 万人のオーストリア＝ハンガリー，4,110 万人のイギリス＝アイルランド連合に続いており，3,240 万人のイタリアよりも上位である。」（教科書②p. 187）

「フランスの人口増加は，出生数が死亡数をほとんど上回っていない。住民 1,000 人あたりの出生数は，ドイツやイタリアが 36 人，ロシアが 54 人なのに対し，フランスは 24 人である。反対に，死亡率は非常に弱く，住民 1,000 人あたり 22 人である。フランスでは 1905 年の死亡数に対する出生数の超過は 37,000 人に過ぎないのに対し，イタリアでは 387,000 人，イギリスでは 475,000 人, オーストリアでは 562,000 人, ドイツでは 862,000 人であった。」（教科書③p. 320）

「もしロシアが，年央の住民 100 人あたり 5 近くの出生（naissances）を記録したならば，フランスは，戦争〔第 1 次世界大戦――引用者注。〕前には 2 しか記録していなかっただろう。今日（1925 年），ドイツの比率は 100 人あたり 2.04，フランスは 100 人あたり 1.98 でしかなく，日本では 3.49 である。つまり，数（le nombre）は，一国に多くの生命，経済力，抵抗力をもたら

す。」（教科書④p. 195）

「1931 年 3 月時点で，フランスには，ほぼ 300 万人の外国人を含む 4,183 万 4,928 人の住民がいる。フランスは人口としてはヨーロッパ列強の中ではロシア，ドイツ，イギリス，イタリアに次いで 5 番目に過ぎない。」（教科書⑦p. 276）

教科書①から教科書⑦まで，出版年は 1883 年から 1937 年への半世紀以上にわたる時間が経過しているが，このテーマが重要視され続ける理由は，「数（le nombre）は，国家における多くの生命（la vie），経済力（la puissance économique），抵抗力（la force de résistance）をもたらす」という教科書④の記述に端的に表れているように思われる。つまり，人口数は国力のインデックスと捉えられている。

3. 移民（・外国人）問題

フランスが受け入れる移民・外国人の問題も地理教科書で継続的に取り上げられているテーマである。教科書②③④⑦⑨には以下のような記述がみられる。

「フランスの人口増加は，他の大部分のヨーロッパの国々よりもかなり弱いものでしかない。死亡率は上昇しておらず，衛生の進歩と大地の浄化の進展にしたがって低下してさえいる。（他国への）移民（émigration）はものの数ではない。フランスがロシアやドイツなどよりもかなり少ないのは出生数である。

フランスには約 106 万人という多くの外国人がいる。最も多いのはベルギー人とイタリア人である。境界（fronfière）であり産業化された地域であるパリは，プロヴァンス地方の沿岸部と同じように，最も多くの外国人を受け入れているフランスの地域である。」（教科書②p. 288）

「魅力的なわが国に来る外国人は多い。毎年約 3 万人の移民（immigrants）がやってくる。フランスには 100 万人以上の外国人がいる。33 万 2,000 人のベルギー人，33 万人のイタリア人，8 万人のスペイン人，9 万人のドイツ人，7 万 2,000 人のスイス人，3 万 7,000 人のイギリス人である。

これらの外国人が徐々に我々の国民性（nationalité）に同化し，その利点と責務をも含めてフランス市民（citoyen français）の資格を願い出ることが望まれている。現時点では，このような希望は実現されるには至っておらず，100 万人以上の外国人がフランスで安楽に生活し，あらゆる労働の領域で我が国民（nationaux）と競合し，フランス市民が負うべき責務を引き受けていない。」（教科書③pp. 320-321）

「移民（l'immigration）は，古くて豊かで，しかし出生率が低下している国にも増加する。それで，近年フランスの南西部には多くの移民（特にイタリア人）がやってきて居を構えるようになってきた。」（教科書④p. 197）

「1931 年 3 月時点で，フランスには，ほぼ 300 万人の外国人を含む 4,183 万 4,928 人の住民がいる。（略）

フランス人口はとても緩慢に増加しており，多くの県（特に南西部）では，死亡が出生を下回っている。

反対に，外国人の数は急速に増加している。1926 年 12 月時点で，特にイタリア人，スペイン人，ベルギー人，ポーランド人が 300 万人いる。」（教科書⑦p. 276）

「フランスは多くの外国人，特にイタリア人，ベルギー人を受け入れ，彼らはフランスに定住しているものの，フランス人が（外国に）移民することは少ない。」（教科書⑨p. 54）

教科書④は，本稿で訳出・掲示した箇所以外にも，国際的な人口移動としての移民の動向について，フランスの状況に限定せず世界的視野で詳しく解説しようとしているが[5]，フランスに移民がやってくる主な原因として，フランスの豊かさと出生率の低さを指摘している点が注目される。教科書③④⑦⑨にはベルギーやイタリアなどのフランス近隣のヨーロッパ諸国からの移民の多さに言及している点で共通している。

フランスの国民性（nationalité）への同化（se fondre）やフランス市民（citoyen français）の資格取得という帰化（naturalisation）の問題に直接に言及していた唯一の教科書が③であった。同教科書の「100 万人以上の外国人がフランスで安楽に生活し，あらゆる労働の領域で我が国民と競合し，フランス市民が負うべき責務を引き受けていない」という記述には，こうした状況にある移民・外国人への批判のニュアンスを読み取ることができ，移民排斥論とも結びつきやすい表現だと思われる。

4. 人種問題

人種（race）問題は，今回検討した 9 つの地理教科書のうち 7 つの教科書で，そして，戦前から戦後にかけて継続的に取り扱われている。以下のように，肌の色によって 4 つの人種に分類し，自分たちが属する「白色人種」が最も「文明が進んでいる（civilisé）」という自己認識が繰り返し述べられている点に注目したい。

「地球の住む人間は，一般的に肌の色によって特徴づけられる，それぞれの人種（races）に属している。

ふつう，地球上には 4 つの大きな人種がある。白色人種，黄色人種，黒色人種，赤色人種である。

私たちが属する白色人種の人間は，特にヨーロッパや西アジアに住んでいるが，移民によって全世界に広がっている。

黄色人種の人間は，平たい顔，細い目，とても黒くて多い髪をもっている。特に中央アジアや東アジアに住んでいる。

黒色人種の人間，つまり，黒人（nègres）は，平たい鼻と縮れた髪をもっている。彼らは特にアフリカに住んでいる。

赤色人種の人間は，弓型の鼻，長い顔，少ないあご髭をもっている。彼らはアメリカに住んでいる。その数は日に日に減少している。

白色人種と黄色人種は最も文明が進んで（civilisés）おり，黒色人種と赤色人種は未だ大部分が野卑（sauvages）である。」（教科書①p. 13）

「人間の人種（Races humaines）――地球の住民は慣習的に 4 つの大きな人種に分けられます。それは：

白色人種	7 億 5,000 万人
黄色人種	6 億 8,000 万人
黒色人種	1 億 5,000 万人
赤色人種	1,000 万人

（略）

赤色人種はアメリカにしかいない。ヨーロッパ人が来る以前には，主にメキシコ，ペルー，ボリビアの高原地帯に集住していた。ヨーロッパ人による征服の際に大量に殺され，純粋な例としてはかなり少ない人数しか残っていない。しかし，ヨーロッパ人との混血は，重要な混合の人口（population）となっている。」（教科書②pp. 33-34）

「人種（la race）――人種（race）という用語は，同じ生理学的な特徴を示す人間のある種の数を意味している。肌の色は，そうした特徴の 1 つを構成しているが，しかし，唯一のものというわけではなく，主要なものというわけでもない。肌の色を基礎とすることは便利ではあるが，間違いや混乱に導くものである。頭蓋骨の形（短頭型，長頭型），髪の色や髪の形状（真っ直ぐ，ウェーブがかかっている，縮れている，など），身長，鼻の形，目の形，なども考慮しなければならない。心理学的な結論を導くことが危険であるのと同様に，純粋に物質的な情報も危険である。しばしば，《人種（race）》という用語の定義として身体のタイプとともに心理的なタイプの定義が同時に採用されてきたことは，あらゆる点で不幸な混乱である。

人種（les races）――確かに，現在の人種に限定した場合でも，人間の人種を分類することは容易ではない。すべての黒人が似ているわけではない。白人の場合でも，スウェーデン人とシチリア人の間には何と大きな違いがあることだろうか！　今日では純粋な人種のタイプに出会うことは稀であるので，特に困難が横たわっている。数世紀にわたって至る所で混血が行われ，例えばフランスでは，多かれ少なかれ，みな混血である。私たちはもはや，十分満足できる分類法をもっていない。毎回，約 20 の複合的な人種の下位区分（sous-races）を区別できるに過ぎない。」（教科書④pp. 177-178）

「移住（peuplement）と人種――フランスは，早い時期にイベリア人とリグリア人，そして特にケルト人の移住を受け入れ，彼らは今日ではブルターニュとマッシフ・セントラルとガリアの人口を代表している。

この古代において，1. 地中海沿岸のいくつかの地点をフェニキア人とギリシア人によって，2. わが国全土を占め文明化したローマ人によって，3. 限定的で，それほど重要でない占領を行ったドイツ人，ノルマン人，アラブ人によって，フランスは占領され，部分的には植民地化された。」（教科書⑤p. 139）

「人間の人種（races humaines）――4 つの主要な人種に区分される。

1. 南北アメリカに僅かにおり消滅しつつある赤色人種，つまり，アメリカ人。彼らは 1,000 万人を超えない。

2. 黒色人種，特にアフリカ人は，最も遅れており，約 1 億 5,000 万人いる。
3. 黄色人種，つまり，とりわけアジア（中国，日本，チベット，モンゴル）のモンゴル人は，中央アジアや東アジアにいる。彼らは 6 億 5,000 万人いる。それは，われわれの文明も模倣して，彼らの古代文明を脱している主な人種である。
4. 最後に，ヨーロッパや両アメリカを支配し，最も発明の才があり，最も活発で，最も進歩している白色人種である。2 つの大きなグループに分類することができる。1. アーリア人，つまり，インド・ヨーロッパ族（ヒンドゥー，ラテン，ゲルマン，スラブ）のグループ。――2. セム族（アラブ，ユダヤ，ベルベル）のグループ。白色人種は 8 億人いる。」（教科書⑥p. XXVI）

「ヨーロッパはかなり早い段階で住民を受け入れた。いくつもの人種が出会い混血を行った。（略）
　ヨーロッパ住民の大多数は白色人種である。言語によって，3 つの大きな集団といくつかの下位集団に分けることができる。（略）」（教科書⑦p. 16）

「人種（Races）――地球上のすべての住民は共通の出自（origine）をもっているのだが，彼らの間には違いがある。（略）
　私たちが属している白色人種（12 億人）は，気候にしたがって，多かれ少なかれ白い肌をもっている。彼らはヨーロッパ全土，西アジアの半分，両アメリカ，北アフリカに広がっている。3 つの人種のうちでは，今日，最も文明化されている。」（教科書⑧p. 15）

教科書④は，肌の色によるステレオタイプな人種分類法を「唯一のものというわけではなく，主要なものというわけでもない」として批判しつつ，頭蓋骨の形，髪の色・形状，身長，鼻の形，目の形といった多くの要素による多様な分類と下位区分を提示し，さらには「フランスでは，多かれ少なかれ，みな混血である。私たちはもはや，十分満足できる分類法をもっていない」としている。今回参照した地理教科書の中では，人種問題に関して最も詳しい解説と慎重な姿勢を保っている。しかし，他の教科書では，肌の色による 4 分類法が根強く残存していたことも確認することができる。教科書⑧の「私たちが属している白色人種」という記述からは，フランスは白人の国という強固な暗黙の前提が窺える。

5.「フランスの一体性（unité française）」

移民（・外国人）問題と人種問題という 2 つの論点は，「フランスの一体性」という 1 つの主題をも提示する。それを取り扱っているのが教科書⑥である。やや長文にわたる記述なので，いくつかに区切りながらみていくこととしたい。

「フランスの一体性（Unité Française）――大西洋や地中海に面する地理的状況のおかげで，そして，大地の肥沃さと自然の国境のおかげで，フランスは巨大な国民（nation, ナシオン）の枠組みが形成されてきた。さまざまな地域が，非常に多様な生産物のようになり容易に交流を行うとき，その住民は必然的に相互の関係をもつ。ある領土が端から端まで徐々に堅固となっていくことで，国民（nation）は，利益と伝統の共同体を形成する。」（教科書⑥p. 65）

すなわち，「フランスの一体性」という概念は，住民相互の「利益と伝統の共同体」という関係性のもとに，畢竟，〈国民（ナシオン）〉概念に収斂するものと捉えられている。それは，以下のような，先史以来繰り返されてきた人口移動（peuplade）の帰結によるものとされる。

「フランス国民の起源――フランス国民（nation française）は，次々とわれわれの国に来たいくつかの人びと（peuples）によって徐々に形成されてきた。それは先史時代における移住の後のことであった。
1. ガリアの南部に長く住んでいたイベリア人とリグリア人；今日ではガスコーニュの人であるとかバスク人とかいうことによってイベリア人を表わす。プロヴァンス地方の人ということによってリグリア人を表わす。
2.　私たちの国全土に広がっているケルト人，つまりガリア人，これは，われわれの人種（race）において，より重い比重を占めている。
3.　地中海沿岸部全域に入植したフェニキア人やギリシア人；マルセイユはアジアのギリシア人によって建設された。
4.　私たちの時代よりも 2 世紀前，ガリアの南に住み着き，ユリウス・シーザーとともにガリア全域，ライン沿岸まで（紀元前 57-51 年）支配を広げ，ガリアの文明をラテン文明に取って替えたローマ人。
5.　5 世紀における侵入（invasion）は人口（population）を僅かにしか変更しなかったゲルマン人；彼らは，より数が多くより文明化されたガロ・ロマン人の言語や習俗をすばやく採用した。われわれの国の名になっているのは，より数が多いゲルマン部族であるフランク族である。
6.　アラブ人（8 世紀），ノルマン人（10 世紀），イギリス人（100 年戦争），これらは限定的影響しかなかった。」（教科書⑥pp. 65-66）

こうした「フランス国民の起源」にまつわる多様な部族のフランスへの移動の記述の後，その総括のように論じられるのは，数世紀にわたる混血を経ながらも，フランス全土に広がる「ケルト人という起源（origine celtique）」を根幹とした〈国民（ナシオン）〉の一体性（unité）という主題である。

「人種（races）――そういうわけで，フランスの人口はとりわけケルト人に起源をもつ。フランス人口を形成する人種は，数世紀にわたって緊密に混合してきた。そこから，わたしたちの国民（nation）の強固な一体性（unité）が生じる。」（教科書⑥p. 66）

このように，「フランスの一体性」という主題は，〈国民（ナシオン）〉の一体性に収斂し，ケルト人という人種がそうした〈国民（ナシオン）〉の起源とされる。

そして，こうした〈国民（ナシオン）〉の一体性に関する議論の幹に，言語と宗教と領土の問題が接ぎ木されている。ここでは教科書⑥の詳細にわたる領土の記述に立ち入ることはせず，言語と宗教に関する記述を示しておく。

「言語（langue）――このフランスの一体性（unité française）はとりわけ言語の共同体によって表面化している。

ラテン語の使用を一般化したローマ帝国の征服は，われわれが話す言語を出現させた。私たちの国で使用されるさまざまな方言は，ラテン語の衰退によって生じ，オイル語とオック語という 2 つのグループに分かれた。

私たちの言語はイル・ド・フランスの古い方言（オイル語）であり，カペー朝の専制の進展にしたがって王国全土に広がった。

領土のほぼ全域で話されているフランス語は，今日では政治的国境をはみ出して，ベルギー，ルクセンブルグ，スイスの一部まで広がっている。

バスク語は，間違いなく原始イベリア人に由来する非常に特殊な言語であり，ブルトン語を話すブルターニュ地方の人びと（130 万人）は未だにケルト人の言語を話す。

宗教――フランス人のなかで圧倒的大多数の伝統的宗教はカトリシズムである。大部分はカルヴァン派のプロテスタントで約 100 万人いる。ユダヤ教徒は約 12 万人いる。」（教科書⑥p. 66）

ここで言及されている「言語の共同体（la communauté de la langue）」には留意が必要である。フランス革命（1789 年）当時，住民の言語は統一されておらず，後に標準フランス語とされる言語を話す人びとは全人口の約半分程度だったと言われており[6]，「国民国家」の住民たる〈国民（ナシオン）〉の形成を目指した公教育制度によって作為的に「言語の共同体」が創出された。この地理教科書では，その点には言及せず，あたかも「言語の共同体」化が「自然に」進行し実現したかのように記述されている。

6. 日本の人口増加

この論点は，「2. ヨーロッパ諸国とフランスとの人口比較」とも関わるが，ヨーロッパ諸国との人口比較を基本的な視点としていたフランスの地理教科書にあって，教科書④では日本の人口増加への言及があり注目される。

「出生率（natalité）――ふつう，文明化があまり進行しておらず，ヨーロッパにルーツをもつ白人が少ない新興国（pays neufs）に多子家族（familles nombreuses）が多い。しかし，多くの場合，出生率は，地理学の領域には属していない道徳的・社会的原因（causes morales, sociales）によっている。ヨーロッパやアメリカといった人口調査が正確に行われている国々では，人口の富裕化と符合した出生率の低下を確認できることは常に留意すべきである。もしロシアが，年央住民 100 人あたり 5 近くの出生を記録したならば，フランスは，戦争前には 2 しか記録していなかっただろう。今日（1925 年），ドイツの比率は 100 人あたり 2.04，フランスは 100 人あたり 1.98 でしかなく，日本では 3.49 である。つまり，数（le nombre）は，一国に多くの生命，経済力，抵抗力をもたらす。」（教科書④p. 195）

このように 1925 年におけるフランスの住民 100 人あたり出生率 1.98 に対し，日本の 3.49 はドイツと比べても圧倒的に高い数値として引き合いに出されている。

「人口の増減は，死亡に対する出生の超過に依拠している。フランスでは，その状況は悪化している（1924 年には 7 万 2,000 人，1925 年には 6 万人）。これもまた大きな不安を呼び起こすテーマである。ドイツでは毎年 50 万人の超過であり，イタリアでは 48 万人，イギリスでは 23

万人以上，オランダでは 10 万人以上，日本では 70 万人の超過である。）」（教科書④pp. 195-196）

このように人口の増減という「大きな不安を呼び起こすテーマ」において，フランスの 6〜7 万人の人口増加に対し，日本の 70 万人という大きな人口増加が言及されている。

Ⅲ.「フランス人口増加連合」との対比

さて，本章では，1896 年に統計学者でパリ市統計局統計官であったジャック・ベルティヨンを中心とし，中央・地方の行政官 18 名，国会議員 5 名など当時の支配層 128 名によって設立された「フランス人口増加連合」による出産奨励運動（pronatalist movement）の人口言説を参照しつつ，本稿でここまでみてきた地理教科書の人口記述と対比させることで考察を掘り下げていくこととしたい。

同団体は，「綱領および規約」によれば「人口減退（dépopulation）がフランス国民に与える危険について，そして出生率の上昇のため税制その他の適切な方法について，あらゆる人びとの注意を喚起すること」を目的とする団体であった。

そして，この団体の関係者が中心となって起草・制定された 1939 年の「家族法典」においては，第 142 条に「人口問題教育は，統計的側面においても，また，道徳的・家族的問題との関係においても，あらゆる教育段階の全ての公私立学校の全教員と全生徒にとって義務的なものである」とする「人口問題教育」の義務が規定された。この「人口問題教育」は年間 6 時間以上とされ，地理・歴史・道徳・家庭科などのさまざまな授業時間において実施されることとされた。この「人口問題教育」は，6 時間という時数規定を削除されたものの，ほぼそのまま現在のフランスの「教育基本法」とされる「教育法典」に継受されている。この規定を足場として「フランス人口増加連合」は，教員向け手引書やポスター等を作成するなどの手段によって，フランスの人口増加の伸び悩みについて子どもたちに警鐘を鳴らしてきたのである[7]。

そこで，本稿でここまで検討してきた地理教科書と突き合わせてみると，論点 1. の「ヨーロッパ諸国とフランスとの人口比較」，さらには論点 5.「日本の人口増加」は，「フランス人口増加連合」の展開する出産奨励運動にとって非常に適合的であることが分かる。つまり，「住民数ではフランスはヨーロッパ諸国の 5 番目」（教科書②），「住民 1,000 人あたりの出生数は，ドイツやイタリアが 36 人，ロシアが 54 人なのに対し，フランスは 24 人である」（教科書③），「今日（1925 年），ドイツの比率は 100 人あたり 2.04，フランスは 100 人あたり 1.98 でしかなく，日本では 3.49 である」（教科書④）といった教科書の記述に関して，生徒に解説しつつ，フランスの人口増加の必要性，さらには多子家族を形成し支援する必要性を説く機会が学校教育において生じる。さらには，「数（le nombre）は，国家における多くの生命（la vie），経済力（la puissance économique），抵抗力（la force de résistance）をもたらす」という教科書④の記述は，そうした人口言説にいっそうの迫力を付与する人間・社会認識を提供してもいる。

また，論点 2. の「移民（・外国人）問題」に関する教科書の記述も，そうした国際的人口比較と連動しつつ出産奨励運動の人口言説形成の契機となる。つまり，教科書にフランスへの移民の多さに関する記述があり，しかも教科書③のように，100 万人を超える移民が労働面（就職，ポスト）において自国民と競合していることを論点化し，しかも彼らが「フランス市民としての責務を引き受けていない」という記述があることは，移民排斥論を内包した出産奨励運動と軌を一にしている。

教科書③の執筆者のひとりマルセル・デュボワ（Marcel Dubois, 1856-1916）に関する補足情報を参照してみると，「フランス人口増加連合」関係者との直接の接点は未詳であるが，この地理学者が

示した強い関心のうちに植民地問題とナショナリズムの問題があったことが注目される[8]。

教科書⑥で取り扱われた論点 4.「フランスの一体性」に関しても，「フランス人口増加連合」が第 2 次世界大戦後に作成・配布した教師用手引書『学校における人口動態論』（1948 年）に同様のテーマが取り扱われており，また，出身地が多彩でありながらも地理的環境や歴史・言語・文明の影響によって「フランス国民（la nation française）」として統合されているという論理展開は「フランス人口増加連合」が作成した『学校における人口動態論』（1948 年）と教科書⑥Kaeppelin, P. et Teissier, M., *La Géographie de la France & des Colonies*（1936 年）において共通している。

さらに，論点 3.「人種問題」に関しても，「フランス人口増加連合」のリーダーのひとりであり，1939 年の「家族法典」の策定を主導したフェルナン・ボヴラが作成したパンフレット『死滅の危機にある白色人種 *La Race Blanche en Danger de Mort*』（1931 年）[9]のスタンスは，フランスが白人の国ということを暗黙の前提としていた教科書⑧と共通している。

Ⅳ．結び

筆者は本科研研究において，初等中等教科書における人口記述の分析の際，（1）移民（排斥）と国籍・植民地，（2）家族のあり方（多子・少子），（3）人口の質（優生学）の 3 つの論点が中心的になることを予想し，また，この 3 つの論点を中心として分析を進展させていきたいと考えている。今回，初等地理教科書を検討して，（1）移民（排斥）と国籍・植民地に関する教科書の記述は多く見られたが，（2）家族のあり方（多子・少子）に関する記述は「ふつう，文明化があまり進行しておらず, ヨーロッパにルーツをもつ白人が少ない新興国（pays neufs）に多子家族（familles nombreuses）が多い」（教科書④）という記述のほかには見られなかった。この教科書④の記述でさえ，「新興国では多子家族が多い」という主旨のものであり，フランスに多子家族を形成しなければならないという出産奨励主義を基盤とし，そこに直接結びつくような記述ではなかった。その点で，地理教科書は出産奨励主義に傾いた記述になってはおらず，抑制的であったと考えられる。

しかし，そうだとしても，フランスにおける移民の多さを生徒に解説する際に，その原因のひとつとしてフランスの出生率の低さ，人口の伸び悩みに触れるとすれば,「ヨーロッパ諸国とフランスとの人口比較」という論点は，出産奨励運動にとって足場となる有利な記述を提供しており，多子家族の形成という論点にまで踏み込んで行くことは可能であった。事実,「フランス人口増加連合」の作成・配布した教師用手引書は，そうした人口比較をベースとして多子家族の形成という論点に繰り返し強く言及している。この場合，人口数，出生率，死亡率，移民の数などの〈数字〉は，家族形成のあり方という線路に入り込んでいくためのいわば「プラットホーム」であった。

また，（3）人口の質（優生学）に関して，それに直接的に結びつくような記述はみられなかった。ただし，人種問題に関して，「白色人種と黄色人種は最も文明が進んで（civilisés）おり，黒色人種と赤色人種は未だ大部分が野卑（sauvages）である」（教科書①）という言及のし方や，「頭蓋骨の形（短頭型，長頭型）」に関する記述（教科書④）には，進化論や骨相学の影響が濃厚に見られ，そこには遺伝に拘泥する優生学の影響が間接的な迂回路を経ながらも滲み出ているという可能性がある。今後の課題としたい。

注

[1] Durkheim, E., *Les Règles de la Méthode Sociologique*, Presses Universitaires de France, 1895,（筆者は第 23 版 1937 年を使用 p. 10, 宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波書店，1978 年 61 頁。）
[2] Hacking, I., *The Taming of Chance*, Cambridge University Press, 1990, p. viii,（石原英樹・重田園江訳『偶然を飼いならす』木鐸社，1999 年 vi 頁。）
[3] Gallouédec, L. et Maurette, F., *Géographie de l'Europe*, Librairie Hachette, 1931, p. Ⅶ.
[4] Kaeppelin, P. et Peyralbe E., *Géographie du Cours Supérieur. L'Europe. Les Parties du Monde. Revision de la France et de ses Colonies*, Librairie A. Hatier, 1937, p. 5, p. 16.
[5] Colin E., *Géographie Générale*, Librairie Armand Colin, 1927, pp.196-198.
[6] 塩川伸明『民族とネイション』岩波書店，2008 年 43 頁。
[7] 「フランス人口増加連合」と「家族法典」「教育法典」における「人口問題教育」規定に関しては，さしあたり拙稿「1930 年代フランスにおける少子高齢化問題と出産奨励運動――『人口問題教育』の成立と関わって――」（『日本教育政策学会年報』第 16 号、2009 年 7 月，240-254 頁）を参照。
[8] Numa Broc, ‘Nationalisme, colonialisme et géographie : Marcel Dubois（1856-1916）’, *Annales de Géographie*, n. 481, 1978, pp. 326-333.
[9] Boverat, F., *La Race Blanche en Danger de Mort*, Éditions de l' Alliance Nationale, 1931.

（本研究は「フランス初等中等教科書における人口記述に関する歴史研究」2013 年度～2016 年度科学研究費補助金〔研究代表者：河合務，基盤研究 C，課題番号 25381026〕に基づく研究成果の一部である。）

(2015 年 1 月 30 日受付，2015 年 2 月 4 日受理)